



「こいつは、合成品じゃないぜ」
ソースがしたたる肉を口に運びながら奴は言う。

「俺がいなけりゃオマエはちっぽけなアー
テイストへ凝り性Vなんだよ」目を細める
奴。

へあんたに未来が描けるものかいV
空気を震わせる事の無い心のつぶやき。

ユニットをしこたま買い込みジャックインするkids。ディスプレイの輝きに魅せられてアーケードへゲーム場Vにやってくる女達。フルポリュームのハウス。人垣をかき分けて奥のエアロックを抜ける。ステイラウェイへ階段Vを上がりきった奥のドアには、へheavenVと刻まれていた。

へこいつはモノホンだVナガノ樫の扉が開く。床の素早いmove。Roomの暗がりに包まれる。

微かな明りに目をやると、人DNAのプログラムがゆっくりと回転していた。

「こいつがCDラインにのらなかつたら

マヌケの企みだと思ってくれ」

△合成音じゃないな、肉声だ△

揺らめく五本指がアツアツのROMチップ△素子△を取り出し、ユニットに組み込む。俺はヘッドセットを着ける。

△TSUKAVの指がエントリーコードを弾き出す。ハイパーな音の中で踊るニンジャ△忍者△。△シャドーダンサー△。

「合成音のコードにてござってね、サンプリングの連続。」

「ちよっとした調整に精をだしたたまものさ。クケイ波もハーモニクス△調音△の与え方一つだな。」

空気がおどける軽いTALK。電腦の半分は次のプロジェクトアイデアで使用中心というところ。

ホログラムの像が切り替わった。かれこれ4月前のVTR。ホール最前列のDANCING KIDS。髪を切り込んだ顔がクローズUPされる。ベースストの叫び。

「こいつを知っているかい」

PIAチケットが突き出される。



△DREAM COME TRUE△、△SEGA△の文字が飛び込んでくる。

「奴ら、JOINTしている。アルバムはチャートのTOPまでいっちゃったし。ホールじゃ△SEGA△グッズが手にはいるって話。」

△こりや、ツアージョイントだけで終る話じゃないな△

LIVEのホログラフが光る。

—— シアワセになってかえってねーっ！

VOCALのミワ。ウラヤスのホールだ。

「プロジェクト△ソニック△が動いているというゴートウ△情報△が入っている。カートリッジゲームだ。春に……」

ストレイトライト△迷光△に包まれ、記憶がとぎれた。

——
ゴートウ 0

土曜の深夜だった。T・Vがドリカムを連れてきた。60分の特番。あっちのチャ

ンネルではイカ？ンがやっていたんだ。
でも、ドリカムの底方にはかなわない。
ファンクのり、シットリSONG、なんでもありだ。歌メロがイカす。T.Vじゃメンバーが集まったイキサツなんかでいて、見応えありあり。曲はもちろん、バッチ・ゲー。

オレのダチには、ドリカムにイキツバナシってというのがいて、ハナシは聞いていたけど、こんなにもんだとはしらなかつた。そいつが言うには、特番の視聴率つてやつが3%のイカス数字を弾いたつてさ。

ゴートウー 1

ウラヤスってというのは初めてだ。デイズニールランドいくのに、隣の舞浜には世話になつてるけど。まずは、文化会館がなかなか見えてこなくて疲れたよ。会場に入ったときは1300の席がもう満員。女がイッパイ。始まるや否や総立ち。

BASSのなかむらうち、キーボードの



ニーヒヤ、VOCALのミワ。コンサートに行く奴はみんな覚えて置けよ。メンバー紹介のとき、

「ワタシがおんなボーカルのーっ！」

といってマイクがつかだされたら、

「ヨシダ みわーっ！」ってみんなで叫ぶんだ。そうすると

「ダヨーン」とおしりふりふりで答えてくれる。これをやるのがキマリ。

圧倒的なVOCALの威力。演奏ナンバーの豊かさ、エレガントなDANCING。

曲とライティングで、ステージが目まぐるしく変わる。月の砂漠、ラスベガスのカ

ジノ、真夜中のベイ……

豊満な質感、溢れる量感、そして、めまい。

SONGへくわばら、くわばらVがイカスぜ。なかむらうちとニーヒヤのデュエットは聞き逃せないね。

P.S P77の「ドリカム・チケットプレゼント」も見てね。